

風の末裔シリーズ・6th シーズンの3

夏蕾 ～なつつぼみ～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>



蒼の里の穏やかな風。

初夏の陽射しの下、修練所の広場を元気に駆け回る子供達の姿があった。固く巻いた葦よしの葉の玉は、軽くてよく弾む。

それを蹴って対戦相手の陣地に入れるゲームをやっているのだ。

「レンー!! 行っちゃぞ、頼むー!!」

「よっしゃ、任せろ!!」

赤いバンダナの少年が、飛んで来た蹴り玉がけてジャンプし、見事なダイレクトシュートを決めた。

「やったあ、レン!!」

各陣営のギャラリーも大盛り上がりだ。今まで蹴り玉に興味を示さなかった女の子達も、混じっている。

「大した馴染みっ振りだな」

土手の上では、執務室のホルズと、すっかり中堅の貴祿の着いたサオ教官が、見下ろしていた。

「ええ、何だか凄く懐かしいですね。あの物怖じなき、運動神経、跳躍力、そして太陽みたいにヒトを惹き付ける魅力。砂漠の子供って、みんなああなんですかね?」

「あ、ああ——っ!!」

少年達の慌てた声、続いてベコンと間抜けな音。

「ふゃあ」って情けない悲鳴。

二人が視線を滑らせた土手の真下に、青銀の髪の少年が額を押さえてうすくまっていた。

「・・・砂漠の子供みんなが、運動神経がいいって訳じゃないよ  
うだな・・・」

「ごめんー、カノン！」

レンがクスクス笑うギャラリーをひと睨みして、駆け寄った。  
「大丈夫か？ 何でよりによって顔面で受けるかなあ？」

バンドナの少年は自分の袖口でカノンの鼻の泥を拭ってから、  
散らばった書物を拾い集めた。

「また書物を抱え過ぎて、前が見えない状態で歩いてたんだろ。  
そんな文字ばっかに埋もれてたら、書庫の壁のシミになっちゃま  
つぞ。たまにはパアッと走ろうぜ」

カノンはまだくらくらした感じで、書物を確かめながら受け  
取った。

「ありがと、でも、これ今日中に読んじやいたいの。また次、  
誘ってよ」

「レンー！！」

仲間と呼ばれてレンは振り返りながら駆け去った。

再び山のような書物を抱えてえっちらおっちら歩く子供を見  
送って、二人の大人は肩を竦めた。



「対照的だな」

「あのオレンジの瞳がなければ、どちらがルウシエルの子息か分かりませぬね」

「運動は苦手なのかな？」

「技術の成績は…程々ですね。持久力はあるんですが。まあ、彼の興味はあちらなのでしよう。最初にこの図書室を見て、目を輝かせていましたからね。限られた滞在期間に、ありったけの書物をむさぼりたいって感じですね」

「そついう所は、やっぱりルウシエル似だな」

「ああ、そうですね」

カノンには自習室の机に辿り着いて、椅子を引くのもどこかしく、書物を開いた。天気の良いこんな昼休みは、誰もいない。ここから、自分だけの時間だ。

午後の陽射しが窓から射し込み、一人きりの自習室は、少年を、遙かな歴史書の世界へいざなってくれる。

「あ、また…」

覚えのある節に触れた。西風の里のソラの書物の部屋で、読んだ内容だ。あの部屋には古今東西の書物だけでなく、ソラの手による写本も沢山あった。

ただ写しただけでなく、古めかしい文章を現代の言葉に訳し

たり、読みやすく心配った注釈がなされていた。ソラの写本を暗記する程読み込んでいたカノンには、それが分かった。

ソラの足跡を辿りながら書物に身を投じると、彼が横にいて、指さし教えてくれている気持ちになった。カノンには、蹴り玉よりもそちらの方が、すこぶる魅力的だった。

放課後、レンとカノンが肩を並べて修練所の戸口を出ようとした所で、サオ教官に呼び止められた。

「レン、良い知らせだ」

「センセ、…って」トは、あれ、オッケーが出たんですか？」

「ああ、昼休みにホルズ殿が、直接伝えに来てくれた」

「や・やったあ!!」

思わずガッツポーズをやりかけたレンだったが、カノンを見て、すぐ控えた。

二人は西風の妖精だが、レンは母親が蒼の妖精で、半分は蒼の一族の血を持っている。蒼の一族のステイタスである空飛ぶ草の馬の訓練を受けさせるべきかどうか、大人達で随分議論があったらしいが、とつとつ許可が降りたというのだ。訓練の経過次第では、草の馬が買えるかもしれない。

「よかったじゃない、レン！ 免許皆伝したら、後ろに乗せてよね!!」

カノンが努めて明るく言って、レンの肩を叩いた。訓練の許可は、蒼の妖精の混血のレンだけなのだ。

「カノンも、訓練だけでも受けられればいいのに……」

「……………」

サオ教官が助け船を出すように話題を変えてくれた。

「カノン、今日あたりハウスの方に来てくれよ。チビ達が勉強を見て欲しいって言っていたぞ」

「あ、はー」

二人は教官センチに挨拶して、帰途に着いた。レンはもう草の馬の話題は口にしなかったが、身体中からウキウキがにじみ出ている。

「よお、砂の国のじゃりじゃりレンー！」

曲がり角で、数人の少年が立ち塞がった。

「お前が触ると草の馬が砂でじゃりじゃりになっちゃうー！」

「へへん、馬の蚤取りになってイイだろー！」

レンは顎を突き出して、少年達と睨み合った。ポケットに手を入れる仕草を見ると、少年の一人がおどけて叫んだ。

「それはごめんだあ!!」

そして全員同時に笑い出した。

蒼の里へ来たばかりの頃、毛色の違う二人をからかって絡ん

だ悪ガキ共は、レンがいつもポケットに常備している『必殺の武器』に、ヒドイ目に遭わされた。すったもんだの末、今ではすっかりお互い認め合う、喧嘩仲間だ。

「草の馬の訓練に参加出来るんだってな。敵しいぞ。泣きベそかくんじゃないぞ」

「はん！ お前らなんぞすぐ追い抜いてやる」

「来週から？」

「多分」

「時間までに馬装済ませていないと、教官にごやされるから、気を付けな」

「うん」

「それと、最初はお尻の皮が剥けるから、下履きを三重に重ねて履いとくんのだ」

「ありがと」

指を立てて少年達と笑い合うレンを、カノンは尊敬の念で眺めていた。自分一人だったら、きっとからかわれた時点で退いてしまっ、一歩も先へ進めなかったらう。

\*\*\*

二人は分かれ道で立ち止まった。

「カノン、ハウスの方へ行くんだろ」

「うん……」

小さい子を相手にするのは、あまり物事を深く考えなくていいので、好きだった。

「レンも来ない?」

「ん? いいよ、数式の宿題やんなきゃ。僕、カノンと違ってちよいちよいって出来ないモン」

「ちよいちよいってなんかやっていないよ」

「そう? 講義と講義の繋ぎ目にとっととやっちゃまった癖に。」

じゃあ、答え写させてくれる?」

「あ…」

「冗談だよ、じゃあね」

「……………」

レンは手を振って駆け去り、残されたカノンは大きく溜め息付いた。レンが蒼の里で得ている物に比べたら、宿題が早く出来る事なんて、薄っぺらい物に感じた。

「あら、いらっしやい!」

ハウスの入り口で、大量の洗濯物を抱えた女性と鉢合わせした。サオ教官の奥方だ。

ハウスってというのは、教官センチの自宅で、皆、何となくそう呼んでいる。拠り所のない子供の、帰るべき家を作る、ってのが教官センチの信念で、常時、親のいない子供達が十数

人たむろっていた。

「おおい、チビ達、砂漠のお兄ちゃんが来たわよ! えっと、

カノン、レンも呼んで晩御飯食べに行きなさいな。二人くらい増えても変わんないから」

「ありがとございます。でも今日は、ユウジーン、早く帰れるって言っていたから」

「そう…」

奥方は残念そうに肩を竦め、カゴを抱えて洗濯場へ歩いて行った。

「わっ…」

そんなに広くはない居間に、チビッコ達がギョムツと詰まってる、こちらを見ている。こ、こんなに人数いたっけ?

「…えっと、今日の宿題は何の科目?」

「宿題はもうやっちゃったヨ!」

「えっ、そうなの? じゃあ…」

「歴史の授業!」

「レーキーシーのジユキョー!!」

子供達が目を輝かせて、口々に同じ言葉を叫んだ。

「ああ、はいはい…」

いつも宿題が終わったら、オマケで歴史の授業と称して、ポチポチと語っていた奴だ。

「どこまで話したっけ？」

「北の国の王様が、砂漠の軍師に無理難題を押し付けたトコ」  
皆、わっと期待顔になって、餡色の肌のセンセイを見上げた。

大陸史や西洋史をベースに、砂漠の古い言い伝えを絡ませ、子供にも分かりやすくした歴史のお話。小さいお話が繋ぎ合わさって、全体の歴史の流れが見えて来る。材料は全てヘソラの書物の部屋< からだ。

「歴史はバラバラに流れる物じゃなくって、一本の大河のような物…なんだって。受け売りだけねど」

「ふうーん！」

「こんなん面白いの？」

「うん!!」

子供達が妙に食い付いて来るので、こちらも手が抜けなくて、語りが終わると、へトへトになった。

帰る準備をしている所で、戸口の御簾が上がった。

「だいたいまあ！」

三つ編みをきっちり編んだ上級生の女の子数人が、裁縫袋を下げてどやどや入って来た。裁縫の手習い所から戻ったのだ。

「あ、あら、カノン、いらっしやい。今日はレンはっ」

「…家で宿題やってる」

「そっ…」

会話が進まない。レンがセットでないと、自分なんかとは話す価値もないって事なんだろっ。

気まずい空気から逃れるように暇いとまをいし、しばらく歩いてから、夕空を見上げてまた溜め息した。

…レンは人気者だ。明るくて物怖じしなくて、誰とでもすぐ友達になれる。留学してすっかり、蒼の里の仲間入りをしている。

それに比べて自分はどつだろっ？ 勉強は一生懸命やっているけれど、それだけで、何だか空振りばかりしている気がする。子供達だって、知らない土地から来た上級生が物珍しいだけだ。きつとそのうち飽きられるだろっ。

なにより…、皆が自分に、レンはレンはっ、って聞いて来るのに、いい加減ウンザリしている。特に女の子には、他の言葉をまずかけられない。

「まったく、レンに用事があるんだったら、直接レンに話し掛けろってんだ」

今では、声を掛けてくる女の子全員を、否目(ひがめ)で見るといふようになってしまった。

「レンがどおしたってえ?!」

・・・!! 唯一の例外の女の子が、ぴよっこり登場した。

「溜め息吐いてると、寿命が百日縮まるのよー!」

「ホ、ホント?!」

「さあね、確かめたヒトがいる訳じゃないし、だからって嘘って証明も出来ないわよね」

紫の前髪のリリは、相変わらずごまっしやくれた屁理屈を捏ねながら、当たり前みたいにズカズカと横に来た。

並んで歩くとカノンより頭一つ小さいが、生きている年数はちよっと多いという。事実、修練所は修了して、執務室でバリバリ働いている。

「今日は早いんだね。じゃあ、ユウジーンも、もう戻っているかな?」

「ああ、ジーンは急の用事が入ったの。棘の森の主様が体調を崩してね。あのお爺ちゃん、ジーンにしか気を許さないから、今日は多分戻れない。それを伝えに来たの」

「そう…」

「ジーンがいなかったら寂しい?」

「まあね、でもジーンがいるって」

「あたしは…」

「えっと? リリ、家に来るの?」

「そうじゃなくてっ! 今あたしと一緒にいるのに、いないヒトの事を思っただけ寂しがったりしないで欲しいわ!」

「あ…、ゴメ…」

リリがギロリと少年を見据えた。

「あっと、えー…」

カノンは「メンを呑み込んだ。このおつかない女の子は、考えなしに謝って済ませようとする子供が、大っ嫌いなのだ。

「えっと、…べ、別にいいじゃないか。ユウジーンがいないのは寂しいんだもん。でも、リリをないがしろにしたつもりなんてないよ」

「そうね」

リリはにっこり微笑んだ。

「そんな事でいちいち怒るあたしがいけないのよ」

「?」

「カノンは目の前のヒトをないがしろにしただけじゃない。皆もカノンをないがしろにしているつもりなんてないわよ。ただちよっとカノンの気持ちに気付けないだけ。それが分かったら、許してあげましょね」

「……」

カノンは立ち止まって、スタスタ先に行く群青色の後ろ頭を



見た。

「リリ」そ…、何で、そんなにドンピシャで、僕の悩んでいる事が分かるの？」

\*\*\*

「およ?! リリ?」

御簾を開けると、レンが着替えの最中だった。

西風の少年二人は、ユウジーンの自宅に居候している。男三人暮らしは例に漏れず、カノンのベッド周り以外は、カオスだった。カノンの枕元だって、ヒト一人横になるスペース以外は書物山脈だ。

「声くらい掛けてよ。それとも僕の柔肌が見たかったのか?」

「蒙古斑も消えないガキンチョのお尻なんか見て、嬉しい訳ないでしょ」

リリは室内のガラクタを乗り越えて厨房にたどりの着き、鍋と、しなびた芋を手を取った。

「げ! お前が料理すんのか?」

「げ、とは何よ。ユウジーンが留守するから、このあたしがわざわざ保護者として来てあげたんじゃないの」

「よ、よせ、僕まだ死にたくない!」

「何よお!」

言い争いする二人は、くすくす笑っているカノンを同時に睨

んだ。

「何がおかしいのよ?! 突っ立ってるヒマがあったら手伝いなさい!」

「ああ、はいはー」

カノンは手桶を持って、外へ出た。

リリは、レンといると本当に楽しそうによく喋る。

一見チャキチャキと快活なリリだが、でも誰にでもって訳ではないのを、カノンは里へ来て程なく気付いた。気を許さない者、許す者を、極端なまでに区別するのが、リリって娘だ。

井戸で水を汲みながら、カノンはその事と、さっきの事を考え合わせていた。初対面からガンガン喧嘩出来たレンは、リリにとって大切な存在なんだろうな。叱られっぱなしの僕は? どういう存在なんだろう…?

「づ、づ、づ……」

真っ黒の芋を前に、レンは呻き声を上げた。

「料理なんか久し振りだから、ちょっと手が滑っちゃったのよ。まあ、多少焦げただけだから大丈夫、大丈夫」

「焦げ? これが? 焦げてるのはな、焦げていない部分もあるから焦げっていうんだ。これは炭だ、炭!」

「なによおー！」

「ま・まあまあ」

カノンがナイフを取り出して、芋の黒い表面を削り始めた。

「焦げたトコなんか削っちゃえばいいじゃない。ほら、こうして削れば…」

削っても削っても真っ黒な中身に、カノンの表情も止まった。まったく、どんな焼き方をしたら、ここまで炭に出来るんだ？ある意味凄いや。

「ほ、ほら、こ、ここが食べられるよ」

カノンが必死で削り出した空豆程の茶色い塊を、レンとリリは目玉を寄せてじっと見て、そして同時に吹き出した。

「な、なに？」

「だって、カノンの真剣な顔！ キャハハ！」

「リリのせいだよ」

「まあ、せつかくだから」

レンが手を伸ばして、茶色の塊を口に放り込んだ。

「…カッチカチだぞ…」

「無理しなくていいわよ」

「歯には自信あるんだ」

芋の数だけの茶色い塊をレンがガリガリ平らげて、結局夕食

はカノンが作った。

「ねえ」

食事が終わって、リリが改まった顔を上げた。

「あだし、今日、泊まっていい？」

「寝込みを襲うつもりか？」

「バアカ！ ね、いいでしょ」

「う、うん」

「そうと決まったら、カノン、その書物、片付けて頂戴」

「え？ ユウジーンのベッド使っくんじゃないの？」

「あだしにそんなムサイ所に寝ろっていうの？」

確かに、ユウジーンのベッドに限らず、訳の分からないガラクタの散乱したこのパオの中で、カノンのベッド周りだけが、唯一清潔感のある場所だった。

カノンは肩を竦めて書物を移動させ始めたが、ちょっと心配が掠めた。リリは「こん所、夜になるとこの家を訪ねて来ては、就寝時間まで入り浸って、そのまま泊まってしまっている。」

「親父さんと喧嘩でもしてんの？」

レンがアッサリと口にした。カノンはハッと成ってハラハラしたが、リリは皿を片付ける手を止めて小さく笑った。

「ううん、…でも今は、あだしといない方がいいの」

二人が蒼の里に留学してすぐに、カノンだけ一度砂漠へ戻った。カノンの祖母…西風の前の長、モエギの君の訃報が届いたからだ。修練所で授業中だったカノンは、いきなり呼ばれて知らせを受け、放心状態のまま、ナーガ長の馬に乗せられて、西風へ飛んだ。

それまでちよつと近寄りがたく感じていた蒼の長殿だったが、祖母の死期を早めたのは自分のせいだと動揺するカノンを、本当に親身に慰め、氣遣ってくれた。旧知だというモエギの君を見送る姿も、背筋をシャンと伸ばして威々たるものだった。

あんな立派な優しいお父さんの、どの辺が不満なんだろう？ まあ、リリは女の子だし、色々あるんだろうな…。

「……………」それで、お前はどうかんだ？」

いきなり話を振られて、ぼつとしていたカノンは我に返った。三人は寝支度して、パオの壁沿いに三角形に配置されたベッドに「ロロロ」して、お喋りしていた。

「え？ えっと…」

「聞いてなかったの？」

「しゅん…」

「罰として、カノンが一番に告白だわね、恋バナ！」

「なんだよ、それ」

大人のいない子供だけ(リリは大人かもしれないが)の部屋が、夜更かしのお喋りで盛り上がるのは、人間だって妖精だって、一緒だ。

「恋バナだったって…」

「カノンの初恋のヒトは？」

「えええ？ えっと…エノシラさんっ」

「うわっ、無難なトコに逃げたな」

「じ、じゃあ次はレンだ、ちゃんと見えよ」

「えへへ、僕、蹴り玉が恋人」

「このやる」

「よし、次はリリだ、包み隠さず白状しろ」

「……………」

「??」

二人は半身起こして、返事のないリリのベッドを見やった。

紫の娘は、お喋り途中の半開きな口のまま、眠りの世界へ入っていた。

「なあんだよ、自分で振つといて」

そう言いながらも、レンは声をすぼめた。

「ガキちゃん、オヤスミ五秒かよ。いっつもヒトの事、ガキンチヨガキンチヨ言う癖に」

「疲れているんだよ。執務室の仕事、ハードなんだろ。ユウジ

ーンだっていつもヘトヘトで、すべ寝ちゃうじゃない」

「まあな」

レンはベッドから身を乗り出して、リリの寝顔を覗き込んだ。

「あーあ、無防備に口開けちゃって」

「あんまり覗くなよ」

「黙ってりゃ、めっちゃ可愛いにな」

「レンは黙っているリリの方がいい？」

「…いいや…」

\*\*\*

白い霧(もや)が視界を覆っている。手足の自由が効かない。

粘り気のある液体の中に潜っているみたいだ。

「…夢…」

カノンは何となく自覚しながら、身体を動かそうと努力した。

しかし、ただの夢とは違う違和感が、霧の向こうから迫って来

た。

「な、何？」

水に落とされた墨のような黒いドロドロが、生き物みたいにこ

ちらへ伸びて来る。カノンの本能がそれを怖がった。(ごう抗)あ

らが(おうと)、身体は動かさない。

〈助けて！ レン！ リリ！〉

叫ぼうにも声が出なかった。禍々しい黒はもう目の前だ。

〈やだあ——!!〉

ドロドロはカノンの身体を通り抜けた。

〈・・・?!!〉

後ろを振り向くと、十歩向こうに、コバルトブルーの髪が見

えた。

〈ユウジーン!!〉

黒い墨の標的は彼だった。ドロドロが一所に集まり、沢山の

鋭い曲がった爪となった。それが一斉に襲い掛かる。

ユウジーンも動けないように、無抵抗なまま、黒い爪に襲わ

れた。顔が恐怖に歪み、悲鳴をあげるが、カノンには声が聞こ

えない。

〈ユウジーン!! ユウジーン!!〉

必死で手を伸ばした。しかしユウジーンを捕えた爪達はその

まま遠去かり、水底に沈むように小さくなって消えた。

〈ユウジーン!! 助けて、ユウジーンを助けて!!〉

カノンは渾身の力で、眠っている自分の身体を覚醒させよう

とした。

——キンキンキンキン!!——

甲高い金属音が意識を引っ張り戻し、カノンは飛び起きた。

隣のベッドでレンも耳を押さえてキョロキョロしている。

リリは？ 既に上衣を羽織って出口に向かっている。

「起こしちゃった？ ごめん、あたし行くから」

「双子石だろ、今の音！ 西風で何かあったのか?!」

レンが叫んだ。

双子石は、ナーガが西風のエノシラに持たせている緊急連絡用の石だ。片方を叩くと、離れた片方も共鳴する。

「そつよ、だから行くの。そんなに心配しなくてもいいのよ。石を叩く余裕があるんだから。あんた達は大人しく待っているわ」

リリは急いだ感じで御簾を開けた。外は夜明け前の薄暮だ。

「リリ！ ユウジーンが!!」

カノンの言葉に、リリは止まって振り向いた。

「ユウジーンに何かあった!!」

「ええっ？ ホントか?!」

リリは冷静に胸元の布製の首飾りを手にとって、チラと見ながら聞いた。

「何でそつよ言うの?」

「夢で…」

「ハア? 夢?」

レンが呆れた声を出し、リリは眉をつり上げた。

「あたしが今急いでいるのは、分かるわよね!」

「でも、あの夢は…」

カノンの言葉を置き去りにして、リリは外へ駆け出して行った。

「……………」

後に茫然とした二人が残された。

「に、西風で何かあったんだろ? でも、リリの言う通り、石を叩く余裕があんだから、大丈夫だよな…。な、カノン」

レンは自分に言い聞かせるように呟いた。

「……………」

「カノン?!」

「あ、うん…」

「何だよ、自分の夢の方が気になるのか?」

「だって、あんなの普通じゃない! ユウジーンが…、ユウジーンに何かあったんだよ、絶対!」

カノンの真剣な表情に、レンは怒っていた肩を降ろした。

「どんな…夢だったの?」

「一通りの夢の話を聞いて、ちょっと真面目な顔になったレンが聞いた。」

「そつよいう夢、よく見るの? 夢が現実だった事、今までにも

あったの？」

「ううん、初めて。でも分かるんだ、ただの夢じゃない！」

カノンの胸の中には、ユウシーンの苦痛の表情が、楔みだいに食い込んでいる。そして黒い爪の恐怖が、まだ背中に鳥肌を立てていた。

里の端の馬撃ぎ場から、紫の光が垂直に飛び立つのが見えた。

ほぼ同時に執務室から鷹が矢のように発ち、少し遅れて長殿の大きな馬も、高空のジェット気流に向けて上昇して行った。

「ナーガ長も西風へ行ってくれるんだ。心強いじゃないか。ね、大丈夫だよ、カノン」

「うん、そうだよね…」

夜明け前の薄明かりの中、レンとカノンは執務室へ向かって歩いていた。カノンの夢の話を、言っておいた方がいいと思っただのだ。

二人は坂を登って、高台にある建物の壁沿いに玄関に回った。執務室に来るのは、留学の挨拶に来た時以来だ。キリリとした大人達が忙しく出入りしていて、何だか近寄り難く思っていた。窓の側まで来た所で、中からの声が聞こえた。

「ナーガ長殿まで行かれる必要があったのか？」

老人っぽいひしゃげた声だ。二人は足を止めた。

「眷族けんぞくといえど、西風は遠い。幾ら高空気流を使っても、行って帰って一日がかり。鷹も飛ばしたし、差し当たっては、リリー一人で充分だったのではないか？」

別の老人の声。

「その間、こちらの草原で何か起こったら、どうするおつもりなのじゃ。だいたい長殿は、西風鼻負が過ぎる」

「……………」

レンとカノンは口を結んで顔を見合わせた。

「農ら古老は常日頃、執務室に口出しせぬよう留意しておる。

しかし、今日は言わせて貰う。西風の事となると、長殿は無理を押し通して、自ら出張って行くことなさる。幾ら亡きモエギの君に長殿が、昔、惚だされていた仲だとはいえ…」

カノンはそこまでしか聞いていなかった。後退りして、段差の縁で足を踏み外して落っこちたのだ。

\*\*\*

—— どしゃっ!! ——

大人の背丈ほどの高さを落ちて、したたかに背中を打った。

しかし、その痛さも霞(かすむ)別の痛みが、心臓をワシ掴みにしていた。

物音に気付いた建物の中から、誰か出て来る。カノンは跳ね

起きて、執務室に背を向けて、カ一杯駆け出した。

レンの自分を呼ぶ声がある。でも足は止まらなかつた。

どんな言い訳も聞きたくない。蒼の里の中心の執務室で、自分の揺るぎなき誇りである祖母が、あんな風に言われた事実は変わらない。まるで、惚れた弱みに付け込んでいたみたいに。

住居区を一気に抜けて、里の奥の放牧地まで走って、やっと立ち止まった。土手の側に小さな厩舎がある。修練所の授業用の、主無しの馬達が繋がれている。

早朝でまだ人気のない馬房へそっと足を踏み入れた…、と同時に、赤いバンダナが後ろから走り込んで来て、カノンの肩に腕を回した。

「ふう、やっと追い付いた！」

「レン…」

「やっぱカノン、本気で走ったら速いなあ。蹴り玉やればいいのに。エースストライカーになれるぞ」

「……………」

「執務室から出て来た奴に、アッカベンベして来てやったよ。あんな連中にカノンの夢の話したって、まともに取り合ってくれるもんか」

話しながら、レンはカノンに背を向けて、一番大きな馬を引

き出して来た。

「カノン、頭絡頼む。僕、鞍やるから」

「レン…」

「行くぞ、ユウジーンの下」。カノンもそのつもりだったんだろ。」

「…僕、一人で行こうと…」

「僕だって行くよ！」

「夢見ただけなんだよ。それで馬泥棒をするんだ、レン」

「だって、そんなのより、ユウジーンが大事だよ。決まってるじゃん。そして、西風のカノンの優れた能力を、蒼の里のモンに知らしめてやる」

「そんな、僕、優れた能力なんて…」

「僕はそう思ってる！」

レンは馬装を終えて、とっとと前に股がった。

「行くぞ、早く乗れ」

カノンを後ろに、レンは軽く馬銜を掛け、大きな草の馬を上手に御して上昇した。初めて乗る馬なのに、全然危なげない。

レンはどんな馬に乗ってもそうなのだ。ヒトだけでなく馬に對しても、曇りのないレンの心は、真っ直ぐ相手のハートに届く。カノンは、そんなレンこそ西風の誇りだと思った。

「棘の森って南西だったよな。カノン、ナビして」

「うん」

里の外へ出るのは初めてだけれど、地形図は、図書室の虫のカノンの頭に、しっかり入っていた。

初めて飛び土地で、二人は方向を違えたが、わぬように前しか見ていなかったの、後方の雲の中から蒼の里へ垂直に降りる光に気付かなかった。

「…ねえ、カノン、さっきの…」

「んん？」

「モエギ様とナーガ長が、昔付き合ってた…みたいな話。ホントかなあ？」

「レン!!」

カノンは後ろからレンの腕を掴んだ。

「お祖母様は、ついこの間、亡くなった所なんだ!」

「あ、ああ、悪かったよ…」

レンは罰悪そうに黙った。ちよっと気まずくなった。

そう、自分が神経質過ぎるんだ。噂なんていつだって話半分なのに…。反省したカノンが謝ろうとした時、後方に気配を感じた。振り向くと、空の一点に小さく騎馬が見える。

「レン、追っ手だ!!」

予測はしていた事だ。レンは心得たとはかりに高度を下げた。

高空では風を掴むのに長けている蒼の妖精に敵いっこない。

眼下は切り立った谷と多少の森林。

「カノン、しっかり掴まってるよ!」

「うん!」

レンは谷の張り出した岩をくぐり、上空からの死角へ入り込んだ。後方の騎馬も、高度を下げて追跡して来る。そうならこっちのモンだ。相手が谷まで降下して来た所で、いきなり上昇して逆死角に入り、森林の陰に飛び込んだ。

「これで、巻けるだろ」

潜んだ木陰で外を見るレンを、カノンは感嘆の目で見つめた。ホント、レンの飛行術は凄い。僕が大人だったら、躊躇なく草の馬の騎手として認めるのに。

ホケッとそんな事を考えていて、不意に後ろから肩を捕まれた。

「ひえっ?」

「なかなかだったな。俺じゃなかったら上手く巻けていたらうけれど」

気配もなくそこにいたのは、二人に見慣れたコバルトブルーの青年だった。



「ユ、ユウジーン…」

髪の毛一本間違（まちが）ひなごう事なき、正真正銘のユウジーンは、腕組みして鼻から大きく息を吐いた。

「まあったく！」

「えっ、何で…?!」

「何ではこつちが聞きたいよ。君らしくないぞ」

あまりの予測外に止まってしまっている二人を、ユウジーンは苛つきながら睨んだ。徹夜で疲れて帰って来た所に余分な用事が待ってりゃ、そりゃそうだ。

「ホルズ様にだいたい聞いた。気持ちは分かるけれど、君達だけで西風に向かうなんて、無茶苦茶だぞ」

「うっん、僕達…」

言い掛けるカノンを遮って、レンが大声を出した。

「気持ちは分かるって?! 分かるもんか！ 西風の者の気持ちは、西風の者にしか分かんないよ！」

「レン…」

一瞬ひるんだユウジーンに気付かれないよう、レンはカノンの手首を強く握った。夢の話はするなって合図だ。

\*\*\*

空気の重い執務室。大机にホルズ。正面に二人の少年が、手をグーにして突っ立っている。

「あー、お前達の気持ちも分かるが…」

話し始めたホルズの脇で、書類を書いているユウジーンが、困り顔で眉を寄せた。

「物事の端っただけ見ちゃいかん。西風を侮蔑する者もいるが、取るものも取りあえず駆け付けけるナーガ長やリリの存在だつてあるのだ。奴等に礼を欠くぞ」

「……………」

二人は俯（うつむ）いて口を結んでいる。

「俺だって、お前達の父親を通して、西風には敬意を持っている。ただ、頭の凝り固まった古い大人には、西風はちょっと前の矮小部族のまんまなんだ。それを變えるのは難しい。古者の愚痴を受け流して来た俺らの非もあるんだが…」

少年二人が押し黙ったままなので、ホルズも鼻で溜め息して、説教を切り上げた。

「まあ、今日はちゃんと修練所へ行くんだ。放課後またここへ来なさい。その頃には鷹が戻っているから、西風で何が起（おこ）ったか教えてやる。それから罰則だぞ」

「厩掃除ですか？」

少年達がまだ黙っているの、ユウジーンが気まずい空気を破るつもりで口を開いた。厩掃除は、子供に出来る一番ポピュラーな罰則だ。

「いや、それはない。馬事係の頭目がカンノンなんだ。どの馬も大切に調整しているのに、子供の玩具じゃない！　って」

二人の少年は顔を上げ、初めて動揺の表情をした。

「奴等には、草の馬に指一本触れせん！　って。厳しいが、仕方がないぞ」

「・・・!!」

ユウジーンも顔色を変えて目を見開いた。それって、レンが草の馬の訓練を受けられる話も、立ち消えたって事だ。

「違っー！」

カノンが叫んだ。

「僕達、立ち聞きした事に腹を立てて、西風に帰ろうとしたんじゃない！」

レンが腕を掴んだが、カノンを止めるに遅かった。

「ユウジーンの所へ行こうとしたんだー！」

「…なんで？」

首を傾げて尋ねる大人二人に、カノンは息を吸い込んだまま止まった。さっきレンが止めた理由に、やっと気付いた。

夢でユウジーンの危機を見て飛び出したなんて、このタイミングでそんなの、『わざとらしい言い訳』にしか聞こえない。

ホルズが腰に手をやって、何度目かの溜め息と共に話を打ち

切った。

「もっいいい、行きなさい」

修練所への鉛みたいな道のりで、カノンは苦しい口を開いた。

「レン…レン、ごめん…」

「謝るな」

レンは正面向いて、カノンに歩調を合わせて、ずっと真横にいた。

「僕が君を信じたかったんだ。それを賣いたんだから、後悔はしないよ」

「レン…」

「いいんだ、僕には青毛がいるし。よく考えたら、草の馬を連れて帰ったら、奴が可哀想じゃん。草の馬はたまに母さんのに乗っけて貰うから、いいんだ」

そしてやっとカノンに顔を向けて、にかっとなめた。

留学の日数の限られている二人は、修練所で受けられる講義の一つ一つを、とても大切にしていた。しかしこの日はかりは、授業に身が入らず、上の空だった。

放課後来るよう言われていたが、二人は昼休みに昼食をパスして執務室へ走るつもりだった。西風からの鷹が早いめに帰っ

ているかもしれない。しかし午前の講義が終わった所で、サオ教官に呼び止められた。

「レン、残念だったな、だがな…」

話が冗長になりそうなのを見て取って、二人は目配せした。名を呼ばれたレンだけ立ち止まって、カノンは素早く教室を飛び出した。とにかく片っ方が執務室で情報を聞いて来られればいい。

里の中心への坂を一気に駆け上って、執務室の戸口で声を掛ける。

「ホルズさん」

返事がない。

御簾を上げて覗くと、留守にしているようで、無人だった。

カノンはそおっと中へ入った。大机の奥の止まり木に、鷹はいなかった。

「まだ戻っていないんだ」

留守に勝手に中に入って、また怒られるかもしれない。すぐに立ち去ろうとして、大机の角にあった書類を落っことしてしまった。

「いつけない」

屈んで拾った。その瞬間、カノンは固まった。

おウネ婆さんの所で眠気覚ましの薬湯を買って、戻って来たホルズは、御簾を開けて、大机の足元に屈み込むカノンを見咎めた。

「鷹はまだぞ。心配は分かるが、留守に勝手に入っちゃいかんよ。んん？」

少年が屈んだまま動かないので、近付いて肩に手を置いたが、木偶でくののようにころんと横に倒れてしまった。

「おいおい？」

目は開いてるが、まばたき一つしない。ちょっと心配になったホルズは、脇に腕を回して起こそうとした。

次の瞬間少年は跳ね起きた。

「ユウジーン！ ヌウジーンはっ?！」

「何なんだ？」

少年の頭で顎を直撃されたホルズは、目がチカチカしている。

「ユウジーン、どこっ?！」

「ユウジーンって…、任務で出ている。お前さんが手に持っている書類だろうが？」

ホルズは顎を押さえながら、つい答えてしまった。

本来なら徹夜のユウジーンは休ませてやりたい所だったが、彼の懇意にしている部族でちょっとした問題が起きて、呼び出

しの依頼が来たのだ。

「おい、一体どうしたんだ?」

肩を掴もうとするホルズの脇をすり抜けて、カノンは一瞬も躊躇なく走り出した。

「そいつを捕まえるー!」

メインストリートの坂を一気に駆け降りる少年に、執務室の戸口からホルズが叫んだ。

また馬を盗んで飛び出しそうな勢いだ。何人かが手を出して捕らえようとしたが、子供は燕みみたいに速かった。

馬繋ぎ場の厩係りが、慌てて厩の前に立ち塞がる。

しかしカノンは横目でチラと見ただけで、躊躇なく外との境界の柵に手を掛けて飛び越え、そのままの勢いで境界を一気に走り抜けて行った。

\*\*\*

外界の草原へ走り出たカノンは、勢いを止めずに走り続けた。さっきの書類に書いてあった部落は、ここから数里ばかりだ。馬がなくても、走り続ければ辿り着ける距離な筈。

だって、だって! 書類に触れた瞬間、頭に飛び込んで来た映像! 昨日の夢と同じ、黒いドロドロの中にユウジーンが見えて、その手に持っているモノが・・・!!

カノンは走りながら両手を口に当てた。

思い返すのも恐ろしい。大好きなヒトが、目の前で為す術もなく、命ない物体に変わっていくさま! あんなの見せられて、ただの夢だと気にしないでおくなって、絶対に出来ない!

しかし、気持ちとは裏腹に、走り続ける足も身体も、悲鳴を上げていた。胸が苦しくて目が眩みそうになる。

優しいユウジーン、兄みたいなユウジーン

神サマお願い、何を引き換えにしてもいいから、今すぐユウジーンの所へ行かせて!!

少年の頭上後方で、キラリと何か光った。背後に迫り来る気配を感じる。追っ手? 捕まる訳には行かない。

しかし、走るカノンの横に滑るように降りて来たのは、騎手を乗せない裸の草の馬だった。

追い抜き際に合わせた瞳は、見た事もない赤い色。

「・・・!!」

根拠もないのにカノンは妙な確信を得て、走りながら、馬のタテガミを掴んで飛び乗った。直後、草の馬は、ドン!! と、急加速して、空の彼方へ彼を運んで行った。

「馬鹿な?! なんだ、あの馬は?」

少年を連れ戻そうと追って来た厩係は、トンでもない速さで



消え去った馬を目撃していた。あんな動きをする草の馬は見たい事がない。いや、草の馬であったのかどうかも、怪しい…。

カノンは必死で、固いゴワゴワのたてがみにしがみついていてた。馬は、馬の走り方をしていなかった。鷹が滑空するように、脚を一杯に広げて、見事に風を捉えていた。

眼下に、山肌へはばり着く小さな部落。

「あすこだよ!!」

馬は素直に急降下した。

そして、真ん中の大きな建物の窓の前まで一気に降りて、いきなり急停止した。カノンは馬の首を飛び越えて、そのままの勢いで窓から飛び込んだ。

「うああああ!!」

中は酒席だった。

数人の男性が囲む大きなテーブルの上を、いきなり飛び込んだ子供が瓶を撥ね飛ばしながらゴロゴロ転がって、反対側の壁に激突して止まった。

一瞬の惨事に、全員唾然として突っ立っていた。今まさに乾杯の声を上げた所で、手に手に酒杯を掲げている。

床に倒れたカノンの真横に、目を真ん丸に見開いたユウジ

ンがいた。依頼の問題が解決して、感謝の一席を…って所だったのだ。

「カ、カノンか?」

茫然とするユウジーンの前で、割れ瓶のカケラをバラバラと落として、カノンは立ち上がった。そして、やにわにユウジーンの手を杯を引いたくって、側の部落人に突き出した。

「飲んでみて!!」

「おい、カノン??」

ユウジーンは少年の肩を掴んだが、部落人達が真っ青になって凍り付いているのに気付いた。

「な、何なんです? 酒に何か入っているんですか?」

部落人達はおろおろして、しどろもどろだ。

「いや…いや、ただ、ちょっとした催眠剤だと…」

「どうして?」

と聞き掛ける言葉に被せて、カノンが、ついぞ聞いた事のない大声で叫んだ。

「じゃあ、飲んでみてよ! ちょっとした催眠剤ならいいでしょ! 違うんだ! これ一口含んだだけで、血を吐いて、海老みたいに反って、あつという間に…動かなくなる!!」

背中に冷水を浴びたようなユウジーンの前で、叫びながらカノンは涙をぼろぼろ溢した。

「どうしてそんな酷い事が出来るの?!」

その時、草の馬の甲高いいななきが聞こえた。

同時に、戸口や窓を破って、黒革の鎧の野党達が、なだれ込んで来た。ヒトの形はしているが、身体が熊のように大きく、首から上は猛々しい獣だ。そしてその手には、カノンが夢で見た、黒い大きな爪。

半人半獣の野党達は、巨大な斧を振りかざして、ユウジーンを囲んだ。

「ふん、そんな人数で俺を倒せる気か?」

ユウジーンは背中への二刀に両手を掛けた。

「よ、よしてください!! 女子供が捕らえられているんだ!!」

部落人の一人が叫んで、ユウジーンも顔色をなくした。

「…何が目的だ?!」

鎧の獣人の一番大きな男が、一歩前に出て唸るように言った。

「知れた事、この地が欲しい。お前らに取って代わるのだ。蒼の一族の厄介な剣士を密かに一人つつ片付けてから、一気に攻めさせて貰うのだ」

ユウジーンの前で、カノンは膝がガクガクしていた。蒼の一族は強くて、彼等の治める草原は平和だと思っていた。

「二刀を使う男は特に厄介だという情報だったので、手を回し骨折ったのだがな。そのチビが現れなければ、何も知らずに、一瞬で逝けたモノを」

獣人達は包囲を縮めた。ユウジーンは脂汗を滲ませて固まっている。

「まま待って!!」

カノンが真ん中に飛び出した。

「よせ、カノン!」

ユウジーンが逃げようとしたが、カノンは震える足で踏ん張った。

「せ、戦争しなくても、蒼の一族にいうことを聞かせる方法があるよ。僕を人質にすればいい!」

獣人達はいきなりな事を言い出す子供にちよっと驚いたが、すぐにせせら笑った。

「ガキが! お前が何者だというのだ?!」

カノンは怖いのを必死で隠して、声を張り上げた。

「僕のお祖母様は、昔、蒼の長の恋人だった。だから僕は・・・蒼の長の血をひいた、貴重な跡取りなんだ!!」

\* \* \*

獣人達が色めき立った。

ユウジーンはしゃっくりしたみたいに唾を飲み込んでいる。

「本来の跡取り候補のリリが味噌ツカスだから、僕が呼ばれたんだ。里でも一部の偉いヒトしか知らない。今までだって、西風の里に何かあったら、長は一目散に駆け付けた。僕がいたからだよ」

トンでもないハッターだ。

しかし、蒼の一族の内部情報を多少下調べして来た獣人達には、なる程と言える説得力があった。

「僕を人質にしておけば、蒼の一族はあんた達に逆らえない。だから、ユウジーンには何もしなくていいでしょ!!」

「小僧!!」

リーダーと思われる大きな獣人がズスズシ迫り、カノンの髪をギリッと掴んで顔を引き上げた。血の色の口に、カミソリみたいな歯がキラキラしている。

「人質というのは、交渉が決裂したら八つ裂きにされるモノだ。知っているか?」

「……、交渉する気があるのなら、今すぐユウジーンに向けている刃(やぐら)を降ろせよ……」

少年は震え声なのに、言葉は引き下がらなかった。

「カノン、もういいよ、せよ」

ユウジーンが言い終わる前に、いきなり外で破裂音が響いた。

——パンパンパン!!——

緊張が途切れた。

「ひ、人質の小屋の方だあ!!」

部落の男が、外へ飛び出した。一人飛び出したら、連動して全員飛び出した。獣人達も、一瞬怯んで集中が分散した。カノンの髪を掴んでいた獣人も、手を緩めた。

それを見計らったように、窓から複数の小さい玉が飛び込んだ。カノンには見覚えがあった。

「ユウジーン! 目を護って!!」

——パパパン!!——

炸裂音がして、部屋中に刺激臭が充満した。

「こ、胡椒??」

「唐辛子も入っている筈だよ」

丸い爆竹を凝視していた獣人達は、目をやられて悲鳴をあげている。

素早く伏せて粉塵を逃れた二人は、床を低く走って、包囲を抜ける事に成功した。

表に飛び出すと、カノンの予想通りの顔があった。

「レン!!」



「カノン、僕を置いて行くなよな!!」

馬上の赤いバンダナが、白い歯を見せて叫んだ。

「見張りの連中、こっちに気が行っていたから、簡単に『必殺の武器』を浴びてくれた。人質の人達は、もう逃げ出したよ」

部落端の小屋の前で、黒い獣人達が顔を覆ってうずくまっている。しかし難を逃れた数人が、逃げ足の遅い子供を追い掛けるようにしている。

「レン！ 馬貸せ！」

レンは素早く飛び降りて、ユウジーンに馬を渡した。

「安全な場所に隠れてる!!」

馬上のユウジーンは二刀を抜いて、風のように獣人に向かって行った。

「僕達もずらかろうぜ」

二人は何処かの建物に隠れようと走りかけた。

——ガシッ！——

カノンの頭が、後ろから押し掴みにされた。

「小僧・・・！ 許さん・・・許さん・・・!!」

目を真っ赤にした、さっきのリーダーだ。鉤みたいな爪が、額にスプリと食い込んだ。

「ああっ」

「は・な・せ!!」

レンが毛むくじらの腕に飛び付いて噛み付いた。

「小僧が・・・!!」

獣人はもう片手で、後ろからレンの首を掴もうとした。細い子供の首なんか、ひと捻りにしてしまいうるな鉤爪。

「レン、逃げて！ 逃げて!!」

——ガッン!!——

カノンを掴んでいた爪が外れた。

落とされた地面から振り向くと、鍬(すき)を握りしめて必死の形相の部落人がいた。さっき逃げ出した部落人が、手に手に武器を持って、視界のない獣人の足を払って叩きのめしていた。

「大丈夫か？ ぼっや」

「は、はい、有難う・・・」

「礼を言いたいの、こっちだ・・・」

獣人達はほとんどが倒された。残った数人が縛り上げられ、皆に取り囲まれて毒づいた。

「俺達をこの人数だけだと思っなよ！ 本隊はもっと肝心の、別の所を強襲している！」

「蒼の里か？ お前達には見付ける事も出来まい」

ユウジーンが二刀を収めながら冷静に言った。

「ふぶん、もっと効率のいい場所だ。砂漠の西風の部落を押し  
えられたら、貴様ら、身動き出来まい」

リンとカノンはその場で跳ね上がった。朝の双子石は、それ  
だったんだ！

「その小僧が蒼の里の皇子なら、尚更だな！」

—— お生憎サマ!! ——

頭の上に紫の光が広がった。

「あんた達のシヨボい鉤爪なんて、父さまの剣の一振り、一  
網打尽だったわよ。西風のヒト達に指一本触れる前にね!!」

紫の前髪の女の子が、愛馬若紫と共に上空から降りて来る。

「リリ!!」

リリの馬は地上に着くと同時に、膝を折ってヘタリ込んだ。

「レン、若紫を頼むわ」

「な…、分かった」

一瞬、口答えしようとしたレンだが、馬のただならぬ様子に、  
慌てて水を取りに井戸へ走った。

「よくここが分かったな」

「当たり前でしょ」

リリが摘まんで示した布の首飾りが、小さく明滅して震えて  
いた。カノンはその時初めて、同じ物がユウジーンの逞しい胸

にもあるのに気が付いた。

「あんた達の大将は、敗戦を認めて撤退の念書に血判を押し  
たけれど…、あんた達、どうするっ？」

リリは腕組みして、縛られた残党を睨んだ。蒼の長の念書は、  
ただの紙切れではない。破れない約束の強い呪縛が掛かっ  
ている。獣人達は、やたらに凄味のある小娘を前に、喉から絞る  
ような唸り声を上げた。

「大将に倣ならうなら、念書代わりに、鉤爪の手首を切り落  
としておくようにって、父さまに言い遣っているの」

獣人達は目を見開いてたじろいだ。カノンも今の残酷な言葉  
は、聞き間違いか冗談かと、リリを見直した。

しかし、ユウジーンも真剣な顔で、獣人の縛った手首をネジ  
上げ、リリに向かって突き出した。リリの手の中でカマイタチ  
の風が渦巻いて、キンキンと高い音を立てる。獣人の顔が恐怖  
で引きつった。

「ま、待って!!」

カノンが獣人の前に立ち塞がった。

「て、手首を切り落とすなんて。もう降参しているのに、この  
ヒト達」

「カノン…」

リリは聞き分けのない子供を言い含める口調で言った。

「あなたの部落を襲ったのよ。一つ道が違ったら、あなた、帰る所をなくしていたのよ」

端で馬に水を与えていたレンも、口を結んで、緊張の顔をした。砂漠の家族に二度と逢えなくなる事を想像して、背筋を凍らせていた。

\*\*\*

「その子を遠去けて頂戴！」

リリは手の中の風の刃やいばをギラつかせながら、部落人に命令した。

「ダ、ダメ!!」

カノンは肩に掛けられた手を振りほどいて、縛られた獣人に覆い被さった。

「ダメダメダメダメ——!!」

「カノン…、大人の決めごに首を突っ込むモンじゃないわ」

「子供にだって、ダメな事位分かる！ これはダメ！ ダメなの——」

リリが瞳をたぎらせて、カマイタチをカノンの足元に投げ付けた。シャッと音がして、地面が鋤(すき)で引っ掻いたみたいに見える、靴の爪先がパッキリ割れた。獣人はカノンの肩越しにそれを見て、血の気が失せている。

「例えばあなたの言う通り、そのヒト達を見逃してあげたとしても。でも、蒼の長の命令は絶対なの。娘のあたしだからこそ、言い付けに背いたのがバしたら、余計に厳しい罰を受けなきゃなんない。すなわち、そのヒト達の代わりに手首を切り落とす羽目になる。ごめんだわ!!」

レンが、持っていた水桶を落っこしそうになって、ウウジーンを見た。コバルトブルーの青年も、獣人をネジ上げた形のまま、無表情だ。リリのいつもの大袈裟な脅しじゃないんだ…。

執務室が色々厳しいとは感じていたけれど、そこまでとは思わなかった。

「リリをそんな目に遭わせない！」

カノンは動かす踏ん張った

「もしそんな事になったら、罰は僕が受ける。それが筋だろ！ 誓いを立てるよ、どうしたらいい？」

リリはそれには答えず、気圧されてオロオロしている部落人に、眉をつり上げて怒鳴った。

「とっととその子をひっぺがして!!」

「リリ!!」

三人がかりで押さえられて、カノンは身悶えしながら叫んだ。「リリはそんな事、しちゃダメなんだ!!」

——ジャキン!!——

リリの投げた風が、鋭く光って空を切り裂いた。

.....

目をつぶって嗚咽おえつを洩らした獣人は、ゆるゆると顔を上げた。縛られていた太い縄と、五本の爪の先端だけが、バラバラと落ちた。

「.....」

「とっとと遠くへ去って頂戴！ もっともこの子供があんた達の代わりに手首を切り落とされても構わないってんなら、いつでもこの辺を彷徨(うろた)っているがいいわ!!」

「.....」

数人の獣人は目を伏せて、皆が睨み付ける中、自分達の馬を引いて山へ消えた。去り際に、一人一人が一度だけ、青銀の髪の毛の少年の顔をチラと見た。

緊張冷めやらぬ空気の中、リリが叫んだ。

「レン!!」

「は、はいっ?」

バンダナの少年は、電気に打たれたみたいに飛び上がった。

「あたし、蒼の里へ報告に行かなきゃいけないわ。この馬貸して頂戴」

言うが早いか、リリはレンの乗って来た大きな草の馬に飛び乗った。

「若紫の介抱をお願いするわ。しばらく動けない筈だから」

「う、うん、分かった。でも、あの…リリ…」

「何?」

「その馬、盗んで来たモノなんだ。既番のヒト、けっこうカンだと…」

リリは再び眉をつり上げた。

「そんな些細な事、どうだっていいわよ!!」

紫の娘は砂塵を舞い上げて急上昇し、あっという間に流星となって東へ消えた。残された者は、脱力感とともに、しんとする。まるで嵐の後だ。

「カノン」

呼ばれて、まだ肩で荒い息をしている少年は、振り向いた。

ユウジーンが瞳に色んな光を湛えて、両手で頭をギュッと抱いて来た。

「ありがとっな…」

「ユウジ…」

何か言おうとしたカノンだが、ユウジーンの懐にべったり付いた自分の血を見て、額に怪我していたのを思い出した。思い

出した瞬間、雷みたいな痛みが来た。

.....

「爪を武器とする者は戦闘前に毒を塗る。基本じゃろうが。何でこの子に気を付けてやらなんだ。何人(なんびと)たりとも、面会謝絶じゃ」

割れ鐘のような頭痛の中、遠くにそんな声を聞いて、また意識を失った。

次に目を覚ますと、白い二重の天幕があった。

痛みはだいぶ治まっている。御簾を開けて、医師のおウネ婆さんが、湯気の立つ薬湯を持って、入って来た。

「起きたか。何、ちょっと傷から熱が出たが、もう大丈夫じゃろ。夕には自宅へ戻れる」

そう言っつて、カノンを支え起こして薬湯を飲ませてくれた。

苦い湯が、からっぽの胃に凍みる。いったいどのくらい寝ていたんだろっつ。

「おお、そうじゃ」

婆さんはベッド脇の物入れから、蓋付きカゴを引っ張り出した。中には、干した果物や飴で固めた干菓子詰まっていた。

「ハウスの子供らが持って来た」

(・・・皆、オヤツ少ないのに・・・)

「うおお!!」

入り口で声がして、頬を紅潮させたレンが飛び込んで来た。

「やっと目を覚ました! カノン、この寝坊助!」

「静かにせんか、他の入院患者もおるのだぞ」

おウネ婆さんはひと釘刺して出て行き、レンは一応そろりとカノンの側に来て座った。

「:僕、どれくらい寝ていたの?」

「七日間」

「そんなに?」

「うん、話したい事が山程あるのに、なかなか目を覚まさないんだもん。傷、どう? まだ痛い?」

「んん、大丈夫。:レンも怪我したの?」

カノンは、レンの肘の大きな擦り傷を見止めた。

「ううん、これは今日の授業で落馬したの」

「えっ? レン...!!」

「ああ、そうそう!」

レンは抱えていた鞆から、真新しい頭絡を引っ張り出した。

「草の馬の訓練、受けられる事になったんだ! 今日で二回目!」

「ホント?! レン、よかった…、よかったね!!」

カノンはレンの肘を掴んで、心から喜んだ。

「何言ってるんだ、お前もだよ」

「えっ?!」

レンは鞆からもう一つ頭絡を出して、カノンに突き出した。

それぞれの頭絡の額飾りには、お揃いの模様が刺繍されていた。

レンのは赤で、カノンのは色違いの青糸。

「馬事係の頭目が、どうせお前ら禁しても禁しても草の馬に乗るんだろつから、自己流の変な癖付けられちゃ堪らん、基礎からちゃんと叩き込まなきゃ駄目だ! って。だからカノンも」

「……………」

カノンは艶々した新品の頭絡を握り締めて、じっと見つめた。

胸が一杯で、何て言っているのか分からない。

「あーら、皇子サマのお目覚め?」

御簾を上げて、紫の前髪が姿を現した。

\*\*\*

「コウシーンに聞いた所によると、あんた大した血統だそうじゃない。嬉しいわ、味噌っカスのあたしに、こおんな立派な甥っ子が出来てー」

リリは、レンが譲った椅子にびっぴか腰掛けて、足組みした。

「で、出任せだよ。あの場を乗り切る為の…」

「ぶひん」

慌てるカノンを、品定めするようにねめつけて、リリは鼻を鳴らした。

「咄嗟によくそれだけ出て来たモンだわね。普段っからそんな願望あるんじゃないの?」

「まっ、まさか…」

カノンは詰まった。この娘にごまかしは効かない。

「…そうだね、あるのかも…。でも、僕は、西風のカノンだ」

「そうね」

リリは素直に話を切ってくれた。

「あ、あの、リリ、西風は? 西風はどうだったの?」

カノンは一番に気になっている事を聞いた。

「無傷よ」

「本当に?!」

「誰一人大きな怪我はしていないわ、ルウシエルもね」

「あ、ありがとっ、リリ・・」

ほおっと肩を降ろすカノンに、リリはちょっと優しい声になった。

「本当は、あたし達が行かなくてもよかった位なのよ。シドが

すっかり、怪しい余所者の情報を掴んでいたの。モエギさんが亡くなって、急に暗躍し出したらしいわ。で、ルウシエルが闘える者を引き連れて、先回りして奇襲をかけたの。凄かったわよ、ルウの起こした竜巻。父さまの仕事なんて、残務整理位だったわ」

その残務整理が戦争には大事なのだ。そこで蒼の長の権威が生きて来る。カノンは今一度、感謝の眼差しでリリを見つめた。

「それにあれ、あのヒトが大活躍だったわ。修練所の教官の…」  
「スオウせんせ?」

レンが口を挟んだ。

「ええ、兜役を買って出て、単騎で獣人達を狭い谷へおびき寄せたの。なかなかの度胸の持ち主だわ。西風にもあんなイヤオト、いるのねえ」

「げえー! リリ、マッチョが趣味なの?」

「バァカ!!」

なんだか、もういつものリリだ。山の部落での稲妻みたいな目のリリは、夢だったのかと思えた。

「元気そうだったと執務室に報告しておくわ。退院はいつなの?」

「今日、もう、戻るって」

「あ、あら、そう…」

立ち上がり掛けていたリリは、ちょっと動揺した。

「じゃあ、後で、荷物、取りに行くわ、レン」

「??」

「リリ、カノンが入院している間、ずっとうちに泊まっていたんだ」

レンが言って、リリは罰悪そうにした。

「カノンのベッド、借りていたわ。事後承諾でコメンなさい」

「あ、ううん、構わないよ」

そんなにお父さんといたくないのだろうか? そっちの方が心配だった。

「リリ、荷物は明日でいいじゃないか」

レンが膝をポンと叩いた。

「今日は僕、床で寝るから、カノンの退院祝いやろうぜ。パシヤマパーティー第一弾だ」

「えっ、ホント? いいの?」

素直に喜ぶリリを見て、カノンも何だかホッとした。リリには色んな顔があるだろうが、こんなにリリでいられる自分達でいよう…、と思っただ。

リリが出て行ってから、カノンは残りの薬湯を飲んで、ベッ

ドから足を降ろして立とうとした。まだ地に足が付かないで、フラフラしている。

「あんま、無理すんなよ」

「うん、だけれど、早くお礼を言いたいヒトがいるの」

「……………」

皆にお礼を言われるべきなのは自分なのに、一体この上誰に感謝したいってんだ、こいつは？。

あの日、気絶したカノンとを診療所へ運んだ後、リリとユウジーンとした会話を、レンは話すつもりはなかった。

「まあ、あの子には恐れ入るわね。こっちの思い通り以上、しつぱり動いてくれるんだから」

「えっ、どうこう事？」

「手首を切り落とすなんて、父さまが命令する訳ないじゃない」

「そっなの？ 僕、思いっきり本気にして、びびっちゃった。

何の為にそんな嘘？」

「剣よりも効く武器が世の中にはあるって事なの……」

「ユウジーンも、自分の懐に付いた血をつくつく眺めながら言った。

「少なくとも奴等は、二度とこの地に足を踏み入れない。あの子供の為に」

「……………」

それから二人が何だかしみじみ黙ってしまったので、レンも口を閉じた。

いつだって、青銀の髪の親友は、自分の半歩先を歩いている。

友達や大人達…女の子達が、気安い自分に話し掛けながら、このミステリアスなオレンジの瞳の少年をチラ見しているのを、レンはちゃんと知っていた。

レンに支えられながらカノンが向かったのは、厩だった。

馬房をくまなく回ってみたが、あの赤い瞳の馬は、見付けられなかった。彼が来てくれなかったら、ユウジーンの危機に到底間に合わなかった。

「一番にお礼、言いたかったのに」

「僕も、カノンは馬を盗んで飛んで行ったと思ったんだ。でも、あの部落に着いた時、ユウジーンの馬しかいなかったから、不思議だった」

「よあ！ レン！」

厩係が現れてカノンは緊張したが、レンは軽く片手を上げた。

「こんにちは、おじさん」

カンカンだったという厩係と、もうこんなに気安くなってい



るなんて、さすがはレンだな…と、カノンいつものように感心した。

「ああ、俺も飛び去るお前の後ろ姿は見たが。こっちは、いなくなっていたのは、レンが盗んだ一頭だけだった。本当に草の馬だったのか？」

「……………」

そう言われると、自信がない。

初めて独りで飛んだので、怖くてひたすらしがみついていた。

ただ……………」

「凄く速かったけれど、優しい馬だったよ。何となくそう思った。確かに見た事がない変わった色をしていた。白っぽくて、粉を吹いたみたいにな…」

立ち止まる足音がして、振り向くと、瞳を大きく見開いたウジーンが立っていた。笑いたいのか、泣き出したいのか…、何とも言えない表情でカノンに歩み寄って、口を開いた。

「砂漠の枯れ草みたいなの、ぐしゃぐしゃなたてがみだったろ」

「…？」

「地平の夕陽みたいな、真っ赤な瞳をしていたら」

「うん…、知っているの？ ユウ…」

ユウジーンが目を細めて、ここにはないモノを見ている感じなので、何となく話し掛けるのが躊躇ためらわれた。

\*\*\*

ハイマツの丘は、丈の高い夏草に覆われていた。

丘のてっぺんの瓦礫の上に、大きな人影が二つ、小さな人影が一つ。

「しかし残念だな、ナーガが不調とは。折角、久々に戻って来たついでに、イビツてやろうと楽しみにしていたのに」

水色の妖精が、長い髪をかき上げながらボヤいた。

「お手柔らかな。奴は今、至上最低にブルーなんだ」

相変わらず恰幅のいい前長のノスリだが、第一線から退いて、少し目尻が下がっている。

「どんな時でも完璧な着の長でいなきゃならない…って健気に頑張っちゃう奴だからな。痛々しくって見てられん。リリまで気を使っちゃまってな…」

「ああ……………」

水色の妖精は、言葉とは裏腹に、心痛そうな目をした。

「仕方がないさ。今は泣くしかない。夜中一人になって、暗い闇の底に沈んで、これ以上ないって位、声を上げて思いっきり泣くんぞ。抑え込みっぱなしだと、壊れちゃう…」

ノスリはしみじみと相棒を見た。

自分もそうだったし、多分、こいつも、『その時』を、そうやって、時間をかけて乗り切ったのだろう。

西風のモエギは、ナーガの人生にとって…惚だされたとか、そういう次元から超越した…かけがえのない存在だったのだ。大切な者を失うって、長く生きて何度も訪れるからって、平気になる訳じゃない。

大働きしてくれた自分の馬に柔草をたらぶく食わせた少年が、二人の所へ戻って来た。

少年には緋色の片羽根があり、後ろを歩く馬の瞳は、彼の羽根と同じ、夕陽みだいな赤い色。

「白蓬(しろよもぎ)、間に合ってよかったな」

水色の妖精の言葉に、少年は片エフホを作ってにっこりした。

預言者でもある水色の妖精…カワセミが、ユウシンの危険を予知した時、彼と少年は、あまりに離れた場所にいた。どんな術の力も届かない、大海を挟んだ遠い東国。

ひと端の望みを託して、少年の馬…白蓬(しろよもぎ)を空馬にして、最速で向かわせたのだ。果たして、蒼の里には、水色の妖精よりも早くに、同じ予知をした者がいた。

「さすが、我が弟子(ルウシエル)の息子だな」

「言ってくれりゃよかったのにな。あの子の父親のソラが優秀な接触感応者だったのは、ホルズだって知っていたさ。ユウシンのベッドで眠っただけで、奴に迫っている未来の危機を予知出来るなんて…。ホント、西風は驚きの才能の巢窟だな」

「自分の価値の分かっているさ加減も、西風の者ならではだな」

四方山話の尽きない大人二人から離れ、少年は、片羽根をふわふわ揺らして、馬と一緒に、丘をスキップした。

コバルトブルーのトモダチが、昔あげた自分の羽根を、ずっと持っていてくれた。しかも、今は二つに割いて、大好きな紫の女の子と半分コにして、首から下げている。

それは、ちょっとウキウキした気持ちになれるコトだった。

〜エピソード〜

蒼の里のいつもの穏やかな風。

「行くぞお!!」

修練所の校庭で、仲間達と澁刺はつらつと駆け回る、赤いバンダナのレン。

「危ない! 避けるー!」

——ベコン!!——

散らばった書物の中で頭を抱える、青銀の髪の少年。いつもの光景だ。

「まったく、蹴り玉を引き付ける磁力でも発してるのか?」

駆け寄ったレンが助け起こすのも、いつもの光景だ。

「やる? カノン」

「ううん、今日中に訳しておきたい書物があるの」

「そうか、頑張り過ぎて図書室の壁の染みになるなよ」

「なったらご飯運んでよ」

「任せとけ」

二人は笑い合って別れた。

カノンは広場の喧騒を背にして、修煉所の自習室に入った。

レンのやるべき事…、自分のやるべき事…、それは多分きくと、別々の物なんだ。

いつものように、頭の中のソラの写本を辿りながら原本を繰り、流石のソラの語学力に感心する。

そしてある時点でぶっつと気付く。

ソラが、自分は読める古語を、わざわざ訳して、難語の注釈まで書き込んだ写本。それは、砂漠でその写本を待っていたルウシエルの為…、そして、いつかその書物に触れる、僕の為だ

ったんだ…!

今日もハウスの子供達に『歴史の授業』の約束をしている。いつの間にか、ハウス以外の子供も混じるようになった。

カノンの話す歴史語りの一つ一つにソラの心が染み込んでいくのを、子供達はちゃんと感じ取っていた。

あの子達の誰か一人でも、未来に、ここと西風を…、そして大きな大河の流れとを繋ぐ者になれば…、それがヘソラの書物の部屋への、行き着く先なんだ。

本を閉じてカノンは、窓辺を見やった。

軟らかい陽射しの中で、長い髪をかき上げながら一心に写本をする青銀の妖精が、そこにいる気がした。

くおしまい

二〇一一・三・六

